

「何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論 ——世界文学的アプローチの試み¹

野中進

はじめに：ゴーゴリとホラティウス

ゴーゴリ『検察官 [査察官]』終盤の有名な台詞「何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！(Чему смеетесь? Над собою смеетесь!..)」² とホラティウス『諷刺詩』I, 1, 69–70 の詩句「何を笑うのだ？名前を変えれば，君の話をしているのだよ (quid rides? mutato nomine de te fabula narratur)」³ のあいだには表現形態と表現内容の両面で著しい類似が認められる。この類似についてどのようなことを言うか，というのが本論の主題である。

この類似についてはモーリッツ・ミヘリソン『ロシアの思考と言葉』（1903–1904）に指摘がある。⁴ ゴーゴリの上記の表現についての項目でホラティウスの詩句が挙げられている。後者のロシア語訳（Чему смеешься? переменивши имя, о тебе Басня повествует）が挙げられているが，説明や解釈は与えられていない。

ミヘリソンの指摘はゴーゴリ研究において広く共有されていないようである。われわれの知るかぎり，彼の指摘を検討・発展させた研究は見当たらない。二十一世紀に出版された二種類のゴーゴリ全集でも『検察官』の注及び解説で，ホラティウスへの言及はない。⁵

¹ 本論は以下のロシア語版を修正加筆したものである：Нонака С. Once again: «Чему смеетесь? Над собою смеетесь!..» — в контексте мировой литературы // Філологічні науки. Полтавський національний педагогічний університет. 30 (2019) С. 15-19.

² Гоголь Н. Полное собрание сочинений и писем. В двадцати трех томах. Т. 4. М., 2003. С. 83. 邦訳は野中による。

³ Horace, *Satires. Epistles. Art of Poetry*. Trans. by H. Fairclough (Cambridge and London: Harvard University Press, 1929), pp. 8–10. 訳文は野中による。

⁴ Михельсон М. Русская мысль и речь: Свое и чужое: Опыт русской фразеологии: Сборник образных слов и иносказаний. В 2 т. Т. 2. М., 1997. С. 497.

⁵ Гоголь Н. Полное собрание сочинений и писем. В двадцати трех томах. Т. 4. М., 2003; Гоголь Н. Полное собрание сочинений и писем. В семнадцати томах. Т. 3–4. Москва – Киев, 2009.

なぜゴーゴリとホラティウスの表現の類似、またそれに関するミヘリソンの指摘は顧みられないのか。これについては次のような反論（反発）が存在するのでないかと推測される：

(1)「そもそもゴーゴリとホラティウスの上記の表現は似ていない。」だが、まさにこの点を本論では検討したい。われわれの考えでは、両者の表現のあいだには表現形式においても表現内容においても重要な類似がある。

(2)「ゴーゴリの不滅の名台詞が他の文学者からの影響（ないし引喩）に基づくという想定はゴーゴリに対して冒瀆的である——たとえ古代ローマを代表する詩人からだとしても。」だが、ゴーゴリとホラティウスにつながりがあるとすれば、それは『検察官』とヨーロッパ古典文学の伝統との結びつきを証するものであり、前者の価値を貶めることにはならないだろう。実際、プーシキンの「人の業ならぬ彫像をわがために建てし... (Я памятник себе воздвиг нерукотворный...)」がホラティウスの頌詩«Exegi monumentum»の引喩に基づくからといって、プーシキンの詩の価値が貶められると考える者はいない。

(3)「ゴーゴリが上記の台詞を書いたとき、彼の念頭にホラティウスの詩句があったという証拠がない。」おそらくこれがもっとも重要であり、ホラティウスの詩句を題辭に掲げたプーシキン「人の業ならぬ彫像をわがために建てし...」と決定的に異なる点である。われわれの知るかぎり、この点に関する直接的証拠はない。ただし、ゴーゴリがギムナジウム時代にラテン語を学んだ⁶ことや、ホラティウスを知っていたことは言うまでもない。

アレクセイ・リュブジン『十八世紀から二十世紀初頭のロシアにおけるローマ文学』では、ホラティウスについて「疑いなく、この詩人はロシア文学に最も大きな影響を及ぼした一人である」⁷と評されている。彼の「何を笑うのだ?...」について言えば、この詩句が十九世紀初頭の知識人のあいだでよく知られていたことは、K. バーチュシュコフの手紙の一節からもうかがえる：「そこでミハイル・ニキーティチはどうしたか？大笑いして詩を書き残した。 *Quid rides? Fabula de te narratur!* 自分の話だろうとね」⁸ (N. グネディチ宛, 1809年12月)。

⁶ Виноградов И. Летопись жизни и творчества Н. В. Гоголя. В семи томах. Т. 1. М., 2017. С. 355.

⁷ Любжин А. Римская литература в России в XVIII — начале XX века. М., 2007. С. 101.

⁸ По: Бабичев Н., Боровский Я. (ред.) Словарь латинских крылатых слов: 2500 единиц. М., 1997. С. 652.

何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論——世界文学的アプローチの試み

また、タラス・ブーリバの次の台詞を思い出される方も少なくないだろう：「ええつと、なんといったかな、あのラテン語の詩を書きおったやつは？わしは読み書きのほうはあまり強くないんでな、それで良くは知らんが、ホラティウスとかいったかな？」⁹

以上のことはゴーゴリとホラティウスの近さを示す「状況証拠」にはなるだろう。ただ、当然ながら、状況証拠は両者のあいだの「影響関係」を証拠づけるものではない。しかし、両者の表現の類似は「影響関係」の枠を越えて論じるべき重要なものを含んでいると思われる。本論ではまさにそのレベルでの議論を、いわば世界文学的な観点から試みたい。

だが、それを行う前に、『検察官』の名台詞がどのように生まれたのか、確認しておく方がよいだろう。

1. 市長の台詞はどう生まれたか？

「何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」という市長の台詞は『検察官』そのものを代表するくらい有名であるため、私たちはそれが最初からあったと思いがちである。だが実際には、この台詞が『検察官』に現れたのは1842年の「最終版（окончательная редакция）」においてである。つまり、伝説的な初演（1836年）では、この市長の台詞はなかったのである。¹⁰

世界研究所が刊行中のアカデミー版全集によると、¹¹ 上記の市長の台詞は1836年の初版にも1841年の第二版にも存在しない。それが現れたのは、1842年に出版された四巻本作品集のために行われた改稿作業においてである。ゴーゴリが初版の一冊に直接行なった書込み（AP36）中に「Что смеетесь, над собой же смеетесь」¹² という表現があり、これが不滅の表現の最初の現れだったと考えられる。AP36を元に、同年出版の四巻本作品集に収められた「最終版」が書かれ、上記の表現も今日知られるかたちに仕上げられたのである。

この点について、アカデミー版の注釈は次のように指摘する：「初版の改稿作業の過程で、市長の性格は（一定の温和さは保持しつつも）より野卑で、激しい要素を持つ

⁹ ニコライ・ゴーゴリ（服部典三訳）「タラス・ブーリバ」『ゴーゴリ全集』第2巻、河出書房新社、1977年、52頁。

¹⁰ 『検察官』初演直後のゴーゴリの反応、とくに大反響が作家にショックを与え出国を引き起こしたという「伝説」についてユーリー・マンは再検討を行なっている：Манн Ю. Гоголь. Труды и дни: 1809–1845. М., 2004. С. 429–433.

¹¹ Гоголь. Полное собрание сочинений и писем. В двадцати трех томах. Т. 4. С. 537–640.

¹² Там же. С. 465.

た」。¹³ 注釈者の解釈によれば、初版における市長の最後の台詞は「デリケートな状況に陥った人間のかなり抑制された反応」だったのに対し、1842年の最終版のそれは「自分自身の盲目さと無力さに激化した人間」を描いているという。¹⁴ 引用を続けると、「[市長の] こうした反応は、一杯食わされたことだけでなく、嘲笑の対象と転じることへの恐怖とも結びついている」。¹⁵ だからこそ「三文文士ども литераторы」への悪口が続くのである。こうした新しい要素が市長の台詞と人物形象に加わったのには、当然ながら、初演後の六年という時間が大きな意味を持っただろう。笑いの対象の明示（「自分のことを笑っているんだぞ！」）、初演時の世評のパロディー的再利用など、ゴゴリが一定の距離感をもって1836年の状況をふり返っていたであろうことがこの箇所改稿からうかがえると、アカデミー版の注釈は結論づけている。¹⁶

さて、1846年、つまり「最終版」が完成した四年後、『検察官の結末』という戯曲が書かれた。ゴゴリが『検察官』にちなんだ書きたいいくつかの付録的・解説的作品の一つである。この戯曲で注目されるのは、「何を笑っているんだ?...」の台詞に非常に大きな、ほとんど中心的な意義が付されている点である。『検察官』を演じ終えた役者と観客たちの会話という設定であるが、市長の台詞をどう解すべきかについて議論が交わされる。

セミヨン・セミョーヌイチ 私は害悪だとさえ思いますよ。この戯曲には私たちへの侮辱が並べられています。これを書いた人物には祖国への愛が認められません。しかも何という馬鹿にした、不遜と言ってもいい…。だいたい私には分かりません、なんだって面と向かって人に言えるのです——「何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ」などと。

フョードル・フョードロヴィチ いやいや、君、セミヨン・セミョーヌイチ、君は忘れてるよ。そう言ったのは作者ではない、市長が言ったのだ。もちろん、腹を立てたペテン師が、笑いものになるのが悔しくてさ。

ピョートル・ペトローヴィチ しかしながら、フョードル・フョードロヴィチ、申しあげたいのですが、あの言葉はたしかに奇妙な効果を生んでおりますぞ。そして、作者が「自分のことを笑っているんだぞ！」と自分に直接呼びかけているように感じた観客は一人ではありませんまい。皆さん、どうか、私が作者に対して個人的敵意やら先入観やら...、まあ

¹³ Там же. С. 622.

¹⁴ Там же. С. 622–623.

¹⁵ Там же. С. 623.

¹⁶ Там же.

何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論——世界文学的アプローチの試み

ようするに何か含むところがあるとは思ってくださいますな。ただ、私自身の感覚をお話しますと、私はあの瞬間、まるで眼前に一人の男が立ち、私たちの風紀や習慣、秩序といったすべてのものを笑い、私たちにもさんざん笑わせた挙句、「あんたがたは自分のことを笑っているのだぞ」と面と向かって言っている気がしたものです。

第一の喜劇役者 どうか私にも一言、言わせてください。それは自然とそうなったのです。役者は通常、自分に向けられたモノローグを観客の方を向いて話しますから。あの場面で市長は怒り狂い、ほとんどわ言を語っていますが、それでも客人の顔に薄笑いが浮かんでいることに気づかずにおれなかったのです。皆を騙したフレスタコーフに投げつけた彼の滑稽な脅し文句が引き起こした薄笑いです。[中略] 作者にはあなた方が話されているような意味を与えるつもりは一切ありませんでした。私がこう申し上げるのは、あの戯曲のちょっとした秘密を知っているからです。さて、私の方からお聞きしたいのですが、もしも筆者が自分自身を笑っているさまを見せようとしているとしたら、どうでしょう？¹⁷

一読して分かるように、このやりとりは複雑である。市長の台詞の意味をめぐって、どの登場人物の説にゴーゴリの真意が託されているのか、見て取るのは容易でない。そもそもゴーゴリが与えようとする意味づけが、本当に市長の台詞を正しく説明するのかどうかさえ定かでない。晩年のゴーゴリがしばしば自作に与えた「道徳的」解釈についてはよく知られている。

いずれにしても明らかなのは、ゴーゴリが読者たちに市長の台詞に注意を向けるように仕向けていることである。市長の台詞は『検察官』という作品を理解する上で重要な鍵だぞ、というメッセージが出されているのである。

そして、ゴーゴリの目論見通り、後世の読者たちはこの市長の台詞に特別な地位を与えてきた。それは何を意味するのかと頭を悩ますことが、本作品を読む面白さの一部にさえなってきたのである。

2. ゴーゴリの表現とホラティウスの表現は対比可能か？

くり返しになるが、1842年の市長の台詞の誕生に「ホラティウスの影」があったことを示す直接的証拠はない。にもかかわらず、両者の表現のあいだに認められる類似

¹⁷ Там же. С. 116. 訳文は野中による。

は、形式面と意味面での対比を可能にも、必要にもしているように思われる。どのような類似があるのか見ていこう：

(1) **形式的類似** もっとも重要なのは、二つの表現がともに「読者（観客）への呼びかけ」の形式を取っている点である。これにより、それらはプロットとメタプロットの二つのレベルで機能することになる。読者（観客）は、それらの言葉がプロット上の役割を保ちつつも、メタプロットのメッセージとして彼ら自身に向けられていることを理解する。そのメッセージ内容は「本作品の主題はあなた自身に関わっている」というものである。

第二の形式的類似は、二つの表現がともに「問い—答え」の形式を取っていることである。しかも、「質問者自身が答えを与える」という形式も共通している：

Чему смеетесь? — Над собою смеетесь!

quid rides? — (mutato nomine) de te fabula narratur.

つまり、これらは「対話」というより「謎かけとその答え」に近い。これらの表現がもたらす意外性と滑稽味も、これに起因するものと思われる。

リズム的な類似にも注目しよう。上の図示で（ ）にくくった *mutato nomine* の部分を除けば、両表現の音節数は似た配置を取っている：5-7（ゴーゴリ）、3-8（ホラティウス）。どちらの表現も、「答え」の方が「謎かけ」より音節数が多く、声に出して読んだとき「後ろが重い（引っ張る）」リズムを作っている。これは、意味的にも後半の「答え」の部分に重きがあることと相応している。

(2) **意味的類似** 『諷刺詩』も『検察官』も諷刺のジャンルとの関係が深い。周知のように、前者はもともと『会話詩 (Sermones)』と名づけられていたが、伝統的に『諷刺詩』と呼ばれ、訳されることが多い。

『検察官』について言えば、この戯曲が諷刺の枠内に収まるものでないことは広く認められている。すでに1842年にユーリー・サマーリンが（コンスタンチン・アクサーコフ宛の手紙で）書いていた：「ゴーゴリほど諷刺から遠い詩人はいないことは何びとにとっても明白でないだろうか」。¹⁸ また、現代の研究者オリガ・メーエルソンは次のように論じている：「自分のことを笑っているんだぞ」という言葉で『検察官』を

¹⁸ Гоголь. Н. Полное собрание сочинений и писем. В семнадцати томах. Т. 12. Москва – Киев, 2009. С. 231. ちなみに、К. Аксаковはサマーリンのこの手紙をゴーゴリに転送している。ゴーゴリが自分に関するこうした評言を意識していた可能性は高い。

何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論——世界文学的アプローチの試み

締めくくることで、ゴーゴリは『検察官』含め自分の文学作品に、諷刺以外の多くの要素を持ち込んだ。¹⁹

私たちの考えでは、ゴーゴリの言葉とホラティウスの言葉を意味的に近づけるのも重要な要素——それは「笑いの自己言及性」、簡単に言えば「自らを笑うこと」である。他人のことを笑っていると思っていた人が、じつは自分もその笑いの対象であったことを発見する「自己認識」の契機——これこそ、笑いの歴史における特別な地位をゴーゴリとホラティウスの言葉に与えたものだろう。笑いが自己認識にとって持ちうる意味を開示した点で、彼らの表現はソクラテスの「汝自身を知れ」と結びつくと同時に、近代的精神を表すものともなった。

よく知られるように、『検察官』の題辞「自分の面が曲がっているのに鏡を責めて何になる」も自己認識と笑いのつながりを示している。また、ホラティウス『諷刺詩』にも「とはいえ、笑いつつ真実を語って何がいけないだろう？（*quamquam ridentem dicere verum quid vetat?*）」²⁰（I, 1, 24）という詩句がある。この二つの言葉で強調されているのは、笑いはその対象の像を歪めるものでなく、むしろ、しばしば正しい像（理解）を与えるものだ、ということだろう。さらに言えば、真実が人間にとって重要なのは、それが自分自身に関わるかぎりにおいて、すなわち自己認識の契機を含むかぎりにおいてだという主張も含まれているのでないだろうか。中立的な第三者的な「真理」よりも、自分自身に関わる出来事的な「真実」の方が人間にとって重要であり、そして後者に至るのにしばしば笑いが役立つという考えである。

「近代とは何か」という問題に関して、自己言及性が論じられることが少なくない。有名な例を挙げれば、アンソニー・ギデンズの「再帰性（*reflexivity*）」²¹、ニコラス・ルーマンの「セカンド・オーダーの観察（*the second-order observation*）」²²などは近代性の原理として、意識が自らを意識する／観察者が自らを観察する／言説が自らに言及する...など自己言及性のさまざまな形態を説明するために用いられる。

まさにこの文脈において、ゴーゴリとホラティウスの言葉は近代においてより大きな注目を集めてきたものと思われる。すなわち、これらの言葉は「笑いの自己言及性」の文学的定式化として読まれるようになったということである。

¹⁹ *Meerson O. «Свободная вещь»: Поэтика неостранения у Андрея Платонова. (Oakland: Berkeley Slavic Specialties, 1997), p. 26.*

²⁰ *Horace. Satires. Epistles. Art of Poetry. p. 6.* 訳文は野中による。

²¹ アンソニー・ギデンズ（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結』而立書房、1993年、53-63頁。

²² ニコラス・ルーマン（馬場靖雄訳）『近代の観察』法政大学出版局、2003年、10-16頁。

このようにして、両者の意味的類似については次のように言えるのでないか。ある一つの思想の発展とその文学的表現、また世界史の新しい文脈におけるその再アクセント化 (перекцентирование, reaccentuation) という観点から、両者のあいだに重要な意味的類似を認めることができる。

3. 東アジアにおける «De te fabula»と«Над собою смеетесь!..»: 近代化と笑い

本論後半では、ゴーゴリとホラティウスの言葉の東アジアにおける広がりを受容の問題に手短かに触れたい。それによって「近代後発国」において近代文学のプロジェクトがどう始まったかを知る素材が得られるだろう。

西欧型の近代化を比較的遅く（具体的には十九世紀後半以降）スタートさせた国々では、新しい理念、科学、技術、政治体制、経済システム、社会慣習などが急速に取り入れられた。そのプロセスは通例、さまざまな困難を伴った。多くの近代後発国では次のような対立の構図が形成される：革新派と保守派、西欧派と伝統派、新しい慣習と古いしきたり、等。また、近代的理念（自由、平等など）へのアンビヴァレントな態度、西欧（とりわけフランス）への憧れとコンプレックスなども、近代後発国に共通する現象と言えるだろう。²³

近代文学について言えば、上述のような社会状況を描くためにもっとも重要なジャンルは長編小説であった。長編小説では大小さまざまな規模の社会的事象を描くことができ、また、急速な変化を遂げゆくさまざまな「言語」を作品内に取り入れることもできるからである。²⁴ 近代化を遂げつつある国では、長編小説が支配的 (dominant) な文学ジャンルとなり、かつ大きな社会的影響力をもつのが通例である。英仏などの「先発国」が経験しなかった（あるいはそれほどの重要性を帯びなかった）事象を描くために、後発国の長編小説は独自の発展を遂げる。そうした長編小説は、他の後発国でもより大きなリアリティをもって読まれ、より深い思想的影響力をもったと考えられる。²⁵ ここで筆者がもっぱら念頭に置くのは、もちろん、ロシアの長編小説であ

²³ 「近代後発国」という観点から日本とロシアの対比を行なった論考として、次のものが示唆に富む。外川継男「明治維新前後の日本人のロシア観」、中村喜和・トマス・ライマー編『国際討論 ロシア文化と日本 明治・大正期の文化交流』彩流社、1995年、43-55頁；高橋誠一郎『ロシアの近代化と若きドストエフスキー：「祖国戦争」からクリミア戦争へ』成文社、2007年。

²⁴ 長編小説の多言語性については：バフチン（伊東一郎訳）『小説の言葉』平凡社ライブラリー、1996年。

²⁵ フランコ・モレットティ（秋草俊一郎他訳）「世界文学への試論」『遠読：〈世界文学システム〉への挑戦』みすず書房、2016年、73-75頁。

何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論——世界文学的アプローチの試み

る。近代文学，とりわけその支配的ジャンルとしての長編小説の発展は，ロシア，日本，中国，その他多くの近代後発国特有（かつ共通）の素材と主題の発見，さらにその受容と変奏によってもたらされた，と言ってもよいように思われる。

前節で述べたように、「自己言及性」が近代の中心的概念の一つだったとすれば，近代後発国の文学でもその受容と解釈が行われたはずである。小説家たちは「近代とは何か／近代化とは何をすることか／自国の近代化はどうあるべきか」などの問題意識をもって小説を書いたからである。ゴーゴリとホラティウスの言葉が彼らの注意を引いた事例があるとすれば，それはまさにこの文脈で考えるにふさわしいものだろう。

本論で取り上げたいのは夏目漱石『三四郎』（初出 1908 年）である。一人の青年が地方から首都に列車で出てきて，大学（当時の日本では唯一の）に入り，新しい学問，思想，風俗，人々に会おうという「近代文学のフォーマット」に教科書的に則ったこの長編小説に，ホラティウスの言葉が出てくることをご記憶の方も多いただろう。そう，与次郎の「ダーターファブラ」である。

二人が話してみると，向ふの方で，急に高い声がし出した。見ると与次郎が隣席の二三人を相手に，しきりに何か弁じている。時々ダーター，ファブラと云ふ。何の事だか分からない。然し与次郎の相手は，此言葉を聞くたびに笑ひ出す。与次郎は益得意になって，ダーター，ファブラ我々新時代の青年は……とやってみる。²⁶

満堂は又悉く喝采した。さうして悉く笑った。与次郎の隣にみたものが，

「ダーターファブラの為に祝杯を挙げやう」と云ひ出した。さつき演説をした学生がすぐに賛成した。生憎麦酒がみな空である。よろしいと云つて与次郎はすぐ台所の方へ駆けて行つた。[中略]

散会の時間が来て，若い男がみな暗い夜の中に散つた時に，三四郎が与次郎に聞いた。

「ダーターファブラとは何の事だ」

「希臘語だ」

与次郎はそれより外に答へなかつた。三四郎も夫より外に聞かなかつた。二人は美しい空を戴いて家に帰つた。²⁷

²⁶ 夏目漱石『漱石全集』第五巻，岩波書店，1994年，439頁。引用に当たってルビを省略した。

²⁷ 同上，442-443頁。

「ダーターファブラ」、すなわち“*de te fabula*”である。「ダーターファブラとは何の事だ」と三四郎に聞かれて「希臘語だ」と与次郎が答えたのは、もちろん、“*It's Greek to me.*”にかけた言葉遊びだろう。与次郎が冗談を言っているのか、三四郎を試しているのか、あるいは本気でギリシア語だと思っているか（多分そうなのだろうが）判然とせず、そこにこの台詞のおかしみもある。いずれにせよ、この言葉遊びが読者の一部に通ずると漱石が考えていたらしいのは、興味深いことである。

時代のエリートたる大学生たちの会食の場面は、彼らが意気揚々と（そこには選良意識とともに日露戦争の「勝利」の余韻が響いているようだが）自分自身と日本の将来について語り合うさまを、軽いアイロニーを込めて描いている。彼らが好んで外国語を用いるさまも描き込まれている（「三四郎の筋向に坐っていた色の白い品の好い学生が、しばらく肉刀の手を休めて、与次郎の連中を眺めてみたが、やがて笑ひながら、*Il a le diable au corps*（悪魔が乗り移っている）と冗談半分に仏蘭西語を使つた」²⁸）。

「ダーターファブラ」について言えば、そもそも与次郎や周囲の大学生が、この言葉の意味、作者、文脈などを知っているのかよく分からない。与次郎は、授業か別の場所で（たとえば広田先生との会話）聞きかじった文句をくり返しているだけかもしれない。本来なら“*de te fabula narratur*”と文全体を引用すべきところ、その一部だけくり返しておかしがっている点、また発音が「ダーターファブラ」と滑稽な響きに訛っている点も、与次郎と大学生たちの軽薄さを引き立たせている。

問題は、漱石が大学生たちのエリートぶりと陽気さ、浅薄な西欧的教養などをアイロニカルに描く小道具として、なぜホラティウスの詩句を使ったかである。ここは色々な議論がありうるところだが、一つの解釈を述べておきたい：周知のとおり、日本社会の真の意味での近代化は、漱石の目にきわめて困難な道と映じていた。それは彼の講演録（「現代日本の開化」「私の個人主義」等）を読んでも分かるが、そもそも彼が文学、とくに長編小説を書いたのは、まさにこの問題に取り組むためだったと考えられる。日本にとって近代化とは何か、それはどのようにして可能か、どれだけの時間と犠牲を要するかなどの問い。西欧の模倣でない（しかしその深い影響は免れない）、自己吟味と自己認識に裏打ちされた「真の近代化」はどのようなものであるべきかなどの問いが漱石の長編では主題化されている。だからこそ近代日本文学における彼のステイタスも突出して高いのだと考えられる。

漱石の描く大学生たちがナイーブ（素朴、幼稚）なのは、まさに自己言及性が十分でないからだろう。「ダーターファブラ」という言葉を使って彼らは誰か／何かを笑っ

²⁸ 同上、439頁。

何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論——世界文学的アプローチの試み

ている。その笑いは彼ら自身には向けられていないようである。だが、彼らが笑うその言葉の原文をたどれば「君の話をしている」のであり、そこに作者のアイロニーが込められている。思うに漱石は、彼らもいずれ近代化の真の問題に突き当たると信じつつ、今はまだナイーブな青年たちを描いたのだろう。『三四郎』以降の漱石の長編でも、日本の近代化は中心的主題であり続けるが、そのトーンはより苦い、悲観的なものとなっていく。

本論の最後に、魯迅（1881-1936）についても簡単に触れておきたい。彼がゴーゴリを愛読したことはよく知られている。弟の周作人の回想によれば、「彼〔魯迅〕の一番影響を受けたのはゴオゴリであった。それも『死せる魂』は第二位で、第一に重要なのは短編小説『狂人日記』『両イワンの喧嘩』喜劇『検察官』などであった」²⁹ とのことである。

『戯』編集部への返信（1934）という文章で、魯迅は『検察官』と自作の関係についてこう書いている。

ゴーゴリは『検察官』のなかで、俳優の口からじかに観客に対して「みなさんは自分のことを笑っていますね」と言わせています（不思議なことに中国の訳本では、この肝心かなめの一句が削除されています）。私の方法は、いったい自分以外の誰のことが書かれているのか、読者がにわかに判断しかねて、人に責任をなすりつけて傍観者となるわけにゆかず、どうも自分のことが書かれているようでもあり、また人間一般のようでもあるが、と感じるところから反省への道を歩み出すように仕向けることにあります。だが私の見るところ、これまで一人としてこの点に注意をはらった批評家はおりませんでした。³⁰

『検察官』中国語訳で市長の件の台詞が削除されたという事実は、残念ながら、本論の筆者には（もっぱら語学力のために）確認できていないが、もしその通りだとすれば、東アジアのゴーゴリ受容史において特記すべきエピソードだろう。近代中国でもこの台詞の意義深さが正しく理解されていたことを伝えるものだからである。

それはさておき、「反省の道」という言葉で魯迅が意味したのは、自己言及性（再帰性）と同義であると思われる。漱石同様、魯迅もまた、自国の社会が本当の意味で近代化するために自己言及性が育つことが欠かせないことを強く意識していた。

²⁹ 引用は次による：竹内好『魯迅』未来社、1961年、75頁。

³⁰ 魯迅（竹内好訳）『戯』編集部への返信『魯迅文集』第六巻、筑摩書房、1978年、58-59頁。

このように、近代化を歩み始めた東アジアでも、ゴーゴリとホラティウスの言葉は「笑い—自己認識—真実」という定式の芸術的表現として受け止められていたのである。

Once again: “What are you laughing at? You are laughing at yourself!”
— In the Context of World Literature

NONAKA Susumu

The article examines a very famous phrase from N. Gogol “What are you laughing at? You are laughing at yourself!” («The Inspector General», 5th Act) in comparison with as famous as the phrase by Horace “Quid rides? Mutato nomine, de te fabula narrator (Why do you laugh? Change only the name and this story is about you)” («Satires», I, 1, 69–70). Although it is impossible to prove Gogol’s allusion to Horace, we should pay attention to the similarity of their phrases, which is worth a “typological” comparison. It is the idea of reflexivity of laugh that makes these phrases similar in their message. As is well known, notions such as “reflexivity” (A. Giddens) or “the second-order observation” (N. Luhman) are regarded as essential features of modernity. Horace’s and Gogol’s phrases present a version of reflexivity in that those who laugh at someone or something else, understand their laugh returns to themselves. Thus, being comical or ironical plays an important role in helping us see ourselves in the way we reflect what and how we are doing.

In the second half of the essay we pay attention to the spreading and perception of Horace’s and Gogol’s phrases. The Japanese writer Soseki Natsume (1867–1916) wrote a novel called “Sanshiro” which depicts an episode where university students gather to have a party. At this party, one student makes fun repeating Horace’s phrase «De te fabula» without, as it seems, fully understanding its meaning. The episode shows the young Japanese elite who regard themselves leaders of the modernization of Japan actually failing to understand European culture and the meaning of modernization. Soseki believed that they would encounter the

problem of modernization more deeply than he ironically depicted in his novel. The modern Chinese writer Lu Xun (1881–1936) gives an interesting example of Gogol's influence. He explains his methodology of literature in that he tries to make his readers see themselves as the protagonists in situations depicted humorously in his works. In this context he refers to Gogol's phrase "You are laughing at yourself". These two examples of the perception of Horace's and Gogol's phrases in East Asia show how they spread among those countries which found themselves «late starters» of modernization. One of their tasks is to develop their own modernization and modernity, not to imitate those of the forerunners, i.e. Western Europe. For that purpose it is important to understand and develop the idea of reflexivity which they thought belongs to the main ideas of modernization.